

## 東京の "消えた川"を探る～東京の小河川-3～

【寄藤 昂】

### 構成

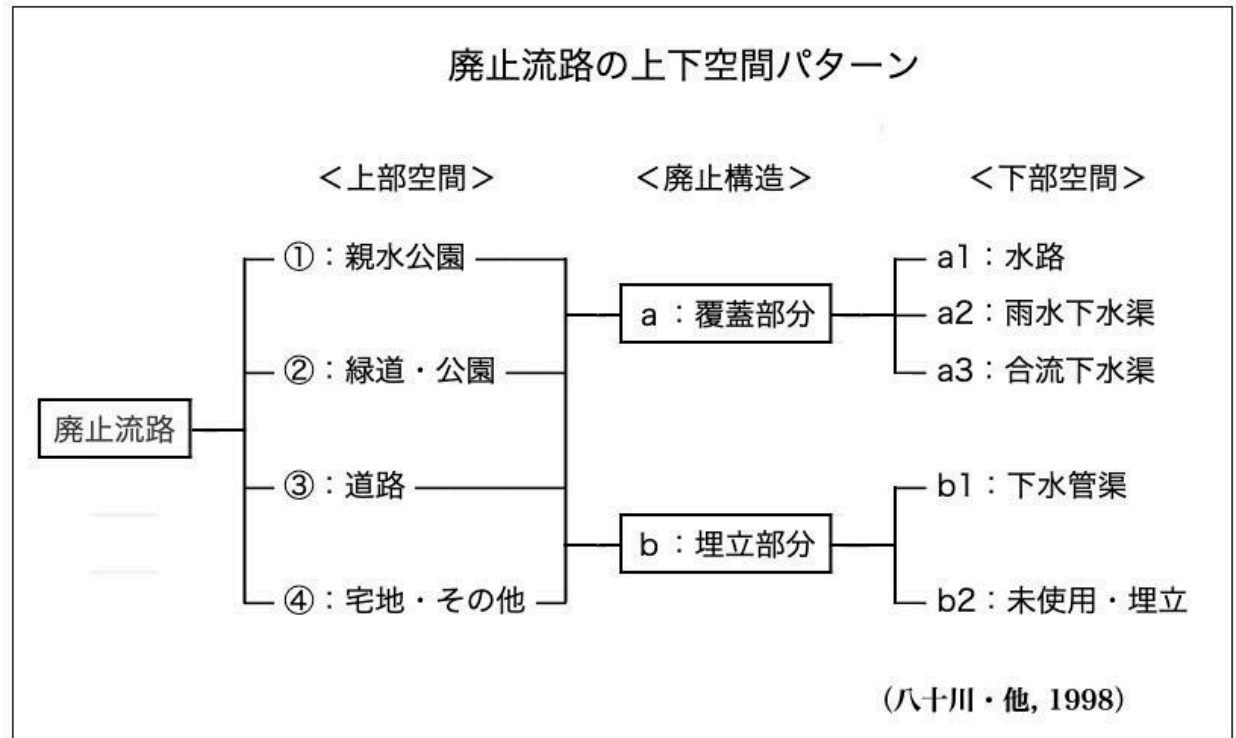
1. 東京の消えた川	1.1 概要	1.2 地形の高低から探る	1.3 土地条件から探る
2. 谷端川とは	2.1 概要	2.2 明治24年の谷端川	2.3 現在の谷端川
3. 「水」はどこに行くのか	3.1 「谷端川」と呼ばれる水路	3.2 ハザードマップで	

### 1. 東京の消えた川

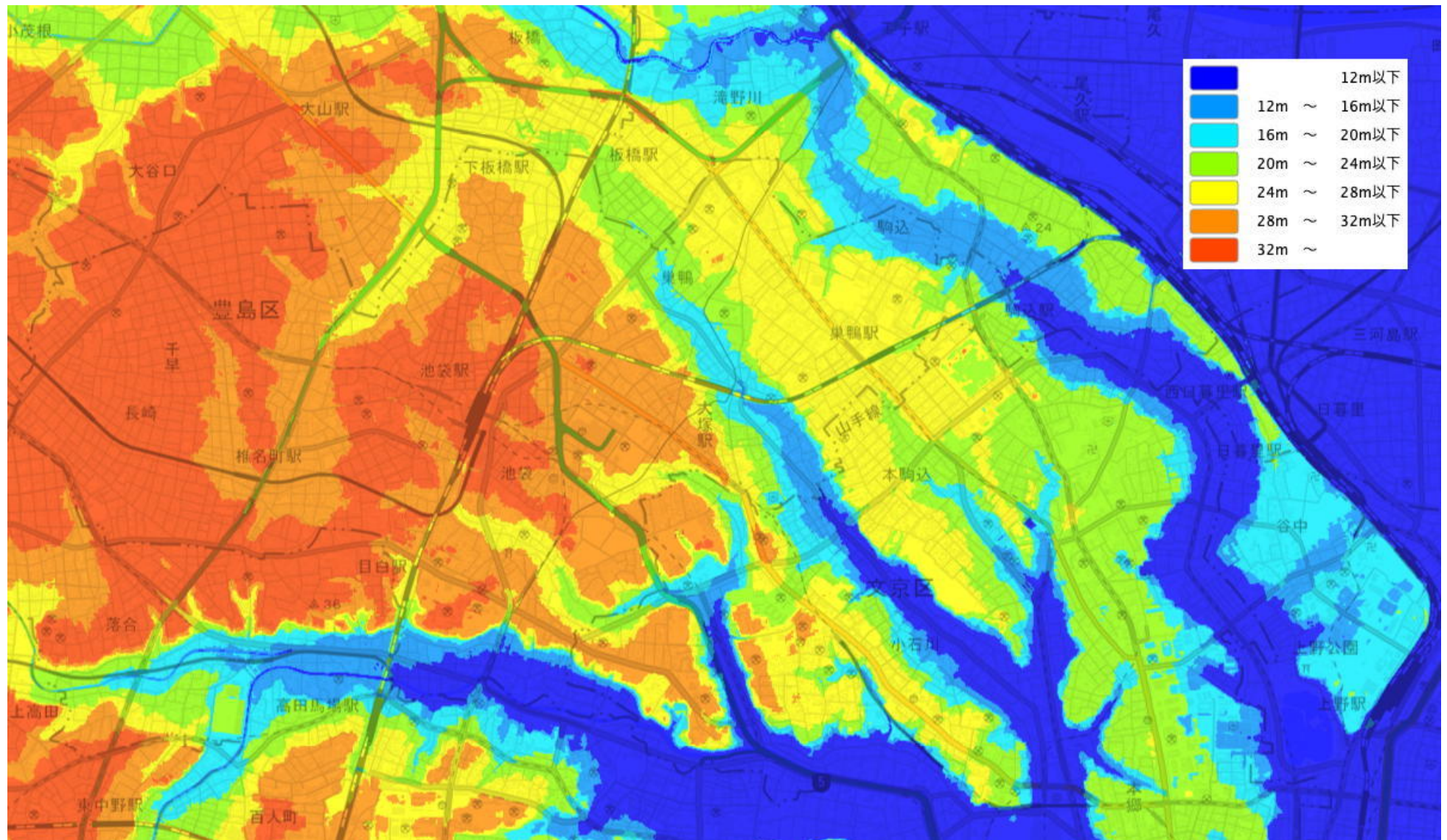
#### 1.1 概要

八十川淳らは、明治16年、明治42年、大正14年、昭和12年のそれぞれの1万分の1地形図（国土地理院）から江戸川・中川・荒川放水路・隅田川・多摩川の各本流を除く東京都区部の小河川を読み取って計測、かつて存在した水路の総延長 862.2km、1998年時点でその内 669.9km（77.7%）が廃止されていること、廃止水路の上部は道路となっているのが 75%、水路上に蓋をした構造の箇所が 33%、それを含めて下部に何らかの通水機能を残すのが 71%と報じている。\*

\*八十川淳・高橋信之・尾島俊雄, 1998, 東京都区部における中小河川の廃止と転用実態に関する調査研究, 日本建築学会計画系論文集, 508, pp.21-27, 日本建築学会

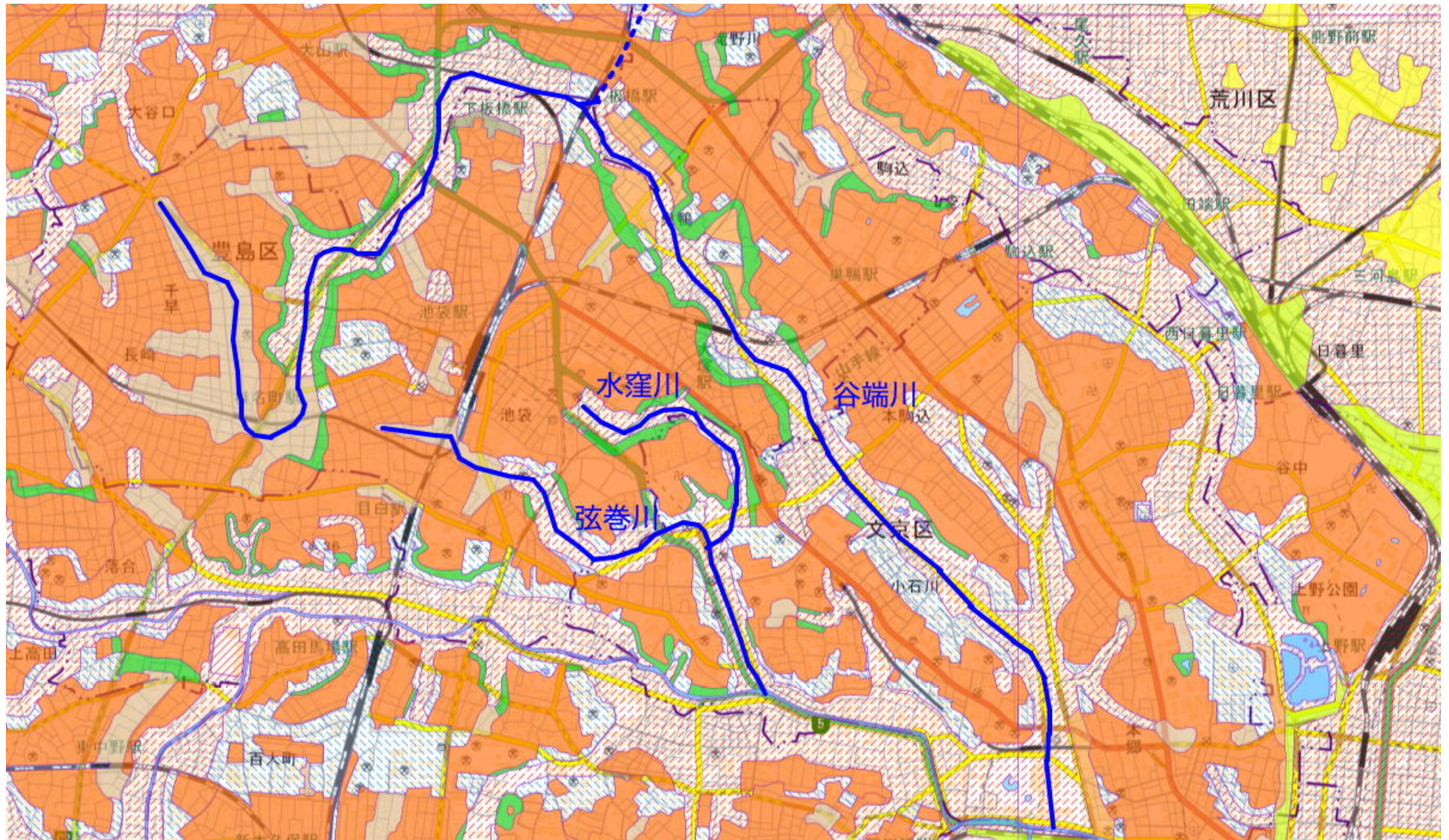


## 1.2 地形の高低から探る





### 1.3 土地条件から探る





## 2. 谷端川とは

### 2.1 概要

東京都豊島区要町の粟島神社境内の弁天池の湧水を水源とする小河川であったが、農業用水を求める流域住民の要望で近くを通る千川上水から分水を受けることとなった。

粟嶋神社から南に、現在の西武鉄道椎名町駅付近まで直線的に進み、椎名町駅を囲むようにUターンして北に向きを変える。現在の山手通りの内側に沿うように北に進み、東武鉄道東上線の下板橋駅前から駅を迂回するように北側に抜け、東に進んでJR埼京線の板橋駅の下を抜ける。そこからは南東にほぼ直線的に進み、大塚駅付近でJR山手線と交差、現在の都道436号線のルートで小石川植物園の西側を経、東京ドームシティの敷地を通過して水道橋で神田川に注いでいた。

流路が南流・北流を繰り返す特異な川で、そのため洪水氾濫も多く2本の放水路が造られている。

本川流路延長は約11km、上流部は谷端川（やばたがわ）と呼ばれたがJR大塚駅以南では小石川または礫川

（こいしかわ）と呼ばれた。また、千川上水から水を受けていることから千川と呼ばれることもあった。

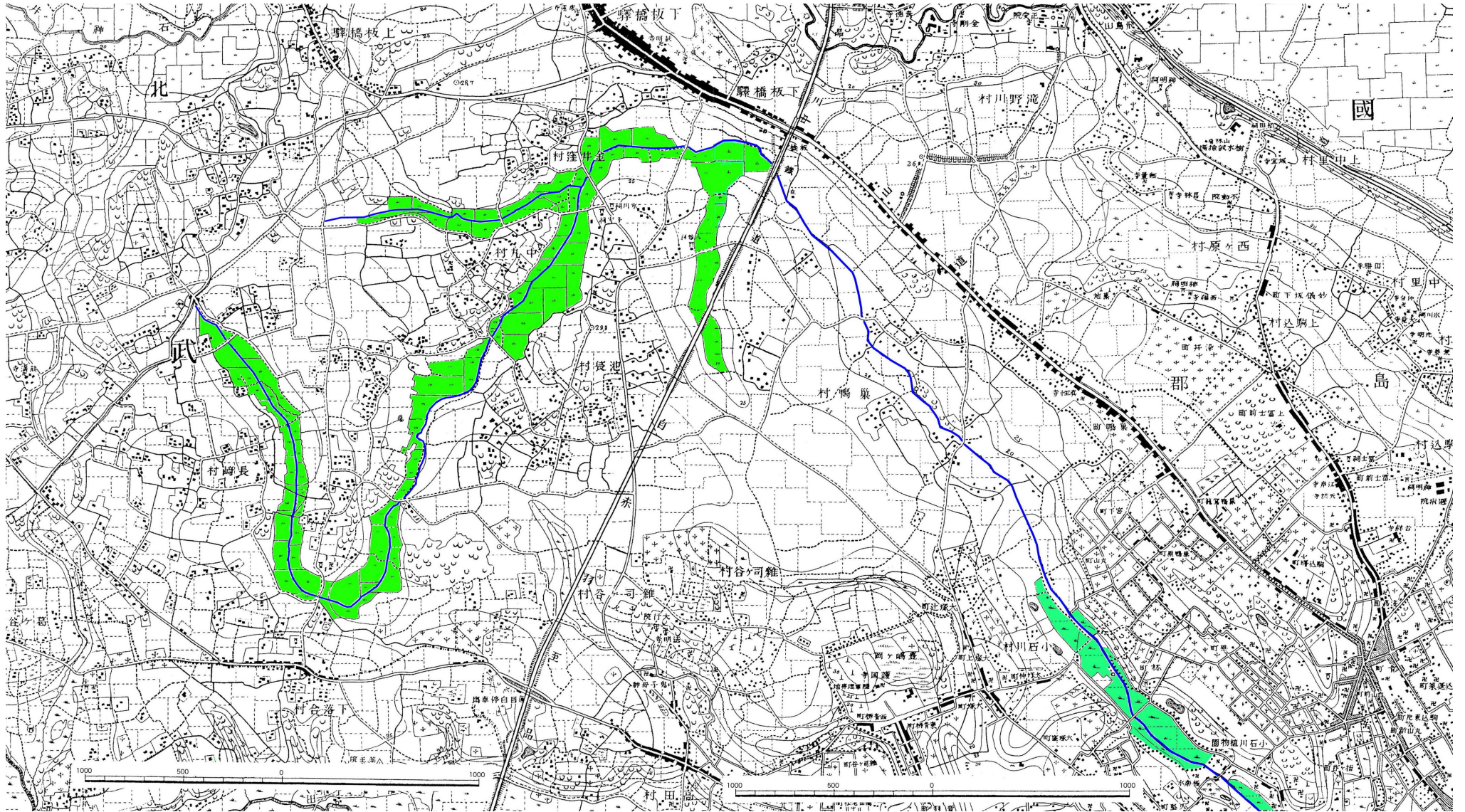
1928年の東京市会の議決によって、千川（谷端川下流部）3,272mを鉄筋コンクリートの暗渠にして上を幅員18mの道路とする工事が始まり、1934年に竣工した。

戦後の経済復興、都市化にともなう流域の変化で、上流域でも工場排水や生活排水による水質の悪化が問題となり、1950年代後半から暗渠化の要望が強まっていた。これを受けて1962年に河川としての谷端川は廃止され、1964年までに全区間が暗渠の下水道となった。





## 2.2 明治24年の谷端川



大日本帝国陸地測量部 明治24年発行 2万分の1地形図「板橋驛」「下谷區」から合成（流路＝青色、水田＝緑色を加筆）



地図に示すように、板橋駅以西の上流部では農業用水の性格が強かった。

ただ水田は下流部の小石川植物園の際にも分布しており、明治期の画家伊藤晴雨による「猫狸橋」の図にもそのことが窺える。

猫狸橋は現在の都道436号線と不忍通りの交差点付近にあったとされ、木橋―石橋―コンクリート橋と架け替えられた後廃止されたが、近くにネコの脚に似せたとも見える形の橋脚が保存されている。



伊藤晴雨「猫狸橋」（文京区立根津小学校蔵）（東京人 no.466, p.53）



### 2.3 現在の谷端川





現在谷端川の痕跡が明瞭に辿れるのは、豊島区の西武池袋線椎名町駅付近から板橋区の東部東上線下板橋駅前にかけて整備されている「谷端川緑道」の区間のみである。

豊島区によって整備、平成3年に開園、西武池袋線から川越街道までの1.7kmが谷端川南緑道で総面積8,885.72m<sup>2</sup>、川越街道から下板橋駅までの0.5kmが谷端川北緑道で同じく2,765.73m<sup>2</sup>となっている。

その上流、粟嶋神社から椎名町駅までは元々水路両側に細い道が並行していたこともあって、平坦に暗渠化されて完全な生活道路となっている。

JR板橋駅以東の区間については全て道路化されており、一部の記念碑や説明板などを除けば痕跡を目視することはできない。





### 3. 「水」はどこに行くのか

#### 3.1 「谷端川」と呼ばれる水路

例えば川が廃止されたとしても、そこが「浅い谷の底」であるという事実は変わらず水は集まってくる。すなわち殆どの廃川が実は「水路が暗渠化」されたものであることを冒頭に示した。

谷端川も "地上" では緑道公園に名を残すだけだが、"地下" には複数の谷端川が現役で存在している。

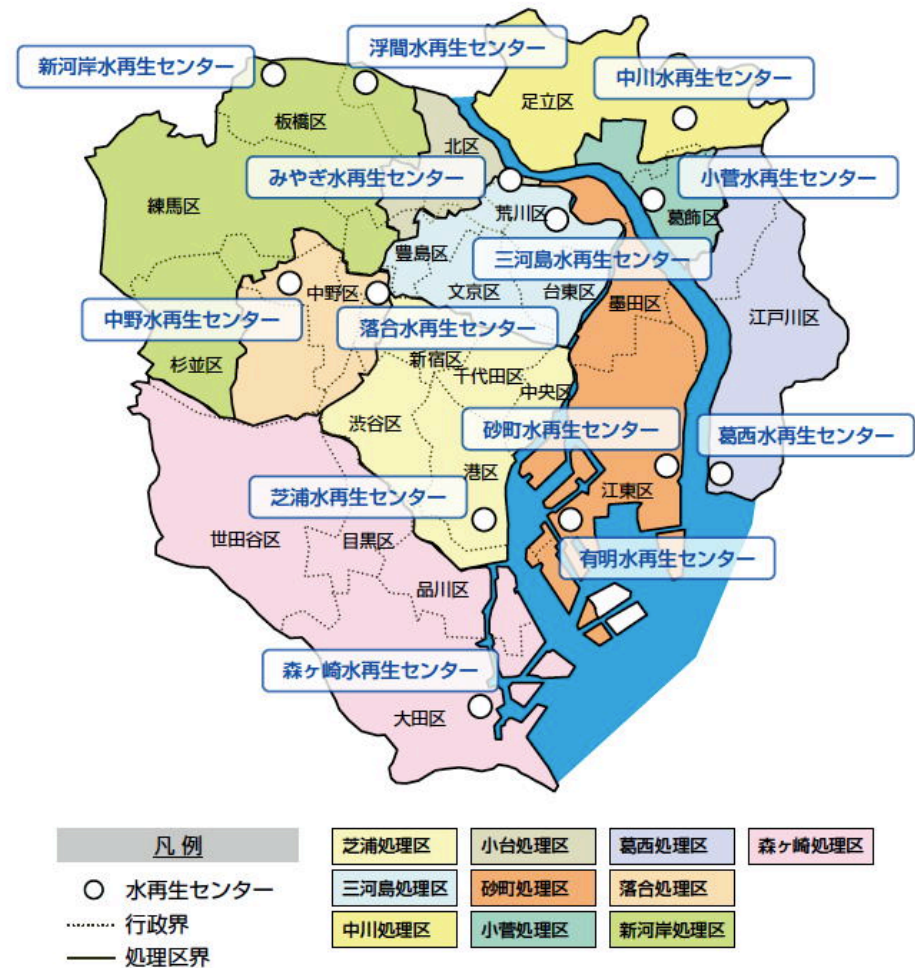
水源とされた栗嶋神社付近から辿ると、まず「要町幹線」として南下するが、途中で東に転じる。そこからの流路跡は下水の枝線が続くが、椎名町駅南側に出ると地下水路は「谷端川上幹線」となって旧流路を川越街道まで進む。途中、立教通りの霜田橋で建設中の「谷端川1号幹線（雨水）」と接続する。この「谷端川1号幹線（雨水）」は立教通りを東に池袋西口に進み、北に転じて最終的には石神井川まで達する計画だが、現状川越街道で止まっていて今はその全区間を「遊水池」として使っている。「谷端川上幹線」は川越街道から新河岸処理区の他の幹線に合流して浮間水再生センターに向かう。

川越街道以北は新たな「谷端川幹線」となって東武鉄道下板橋駅まで進むが、そこから元の流路と離れて北に向かい、小台処理区の他の幹線と合流、石神井川を超えてみやぎ水再生センターに向かう。また、下板橋駅からは雨水専用の「谷端川幹線（雨水）」が元の流路に沿って東進し、JR板橋駅東側から埼京線に沿って北に向かい石神井川に直結している。この谷端川幹線（雨水）の板橋駅以北の流路は、かつて谷端川に設けられていた石神井川への分水路と重なっている。

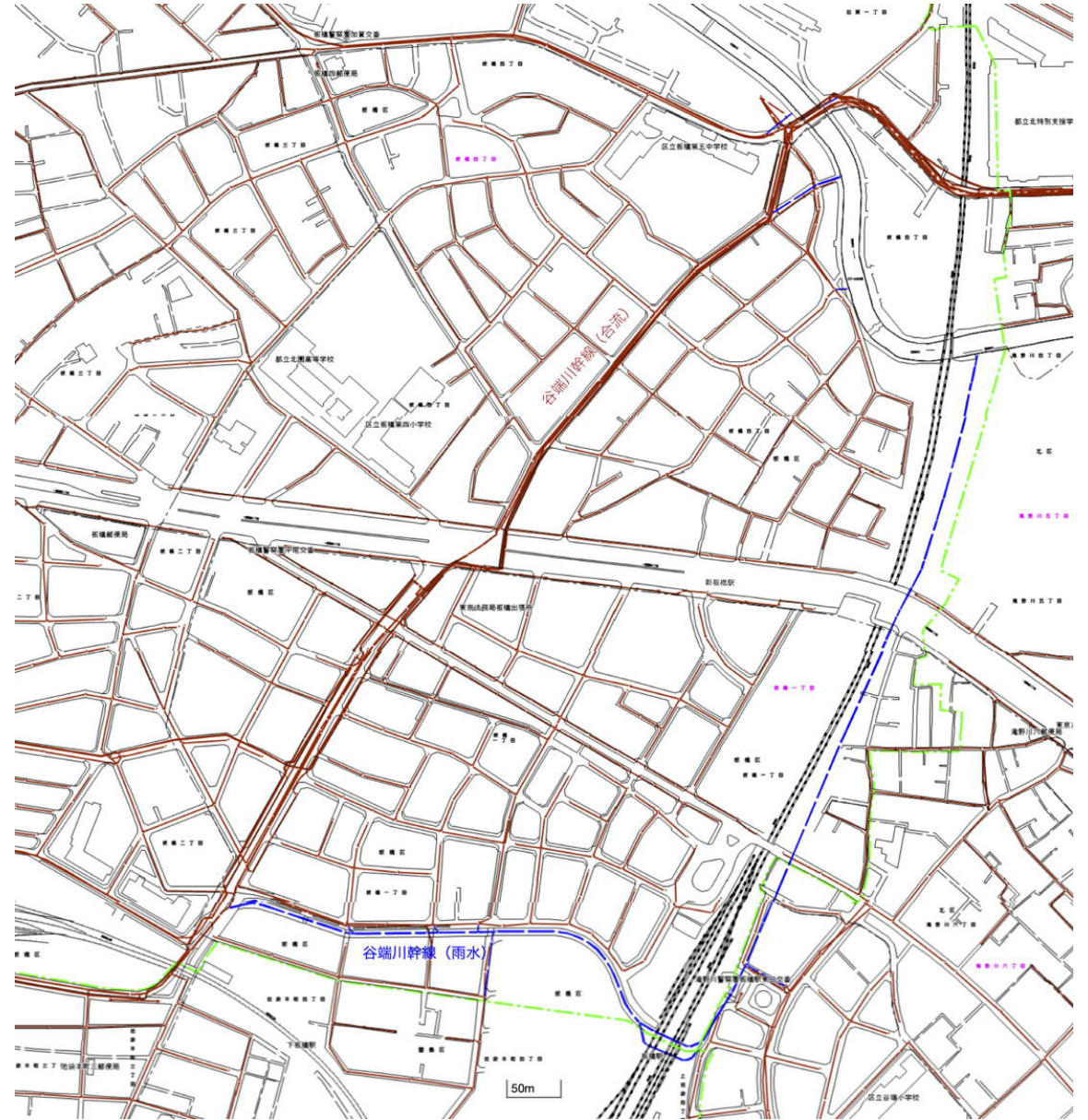
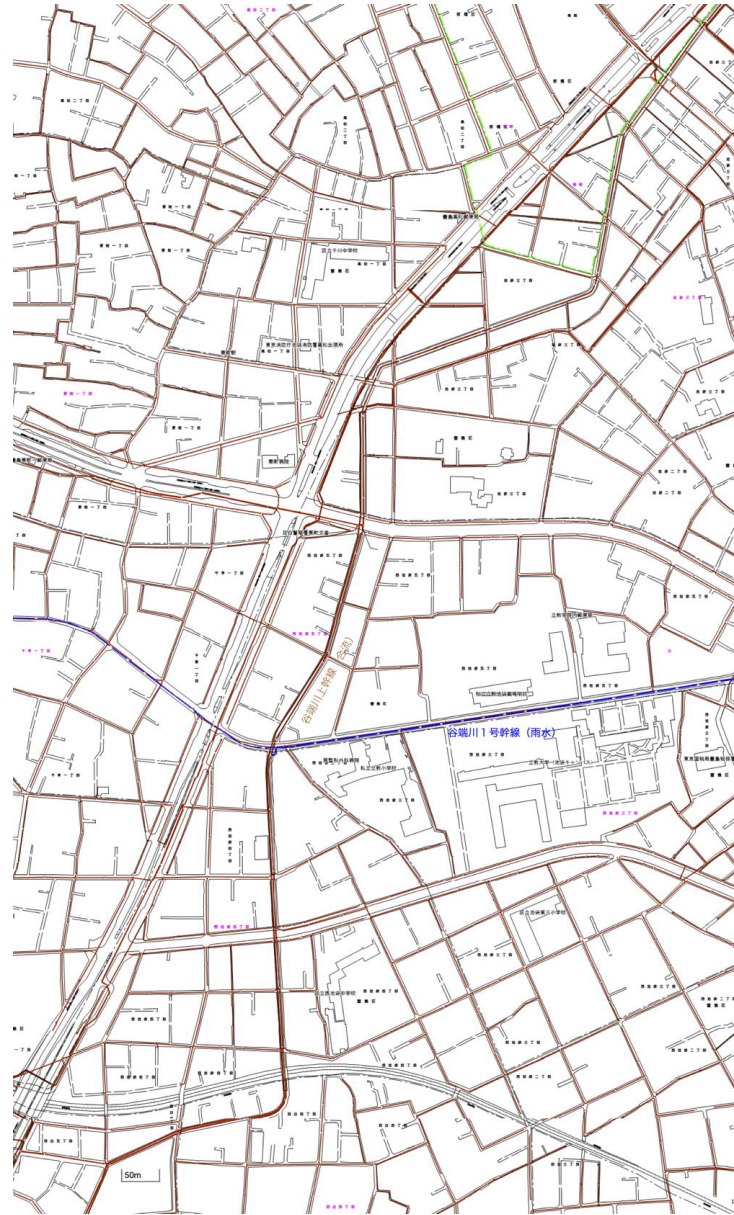
板橋駅以南は「千川幹線」となり三河島処理区の他の幹線と合流して三河島水再生センターに向かう。

豊島区は比較的小さな区なのだが、ちょうど下水の処理区の境界と重なっていて地域が3つに分割されている。

区における水再生センターの配置と処理区

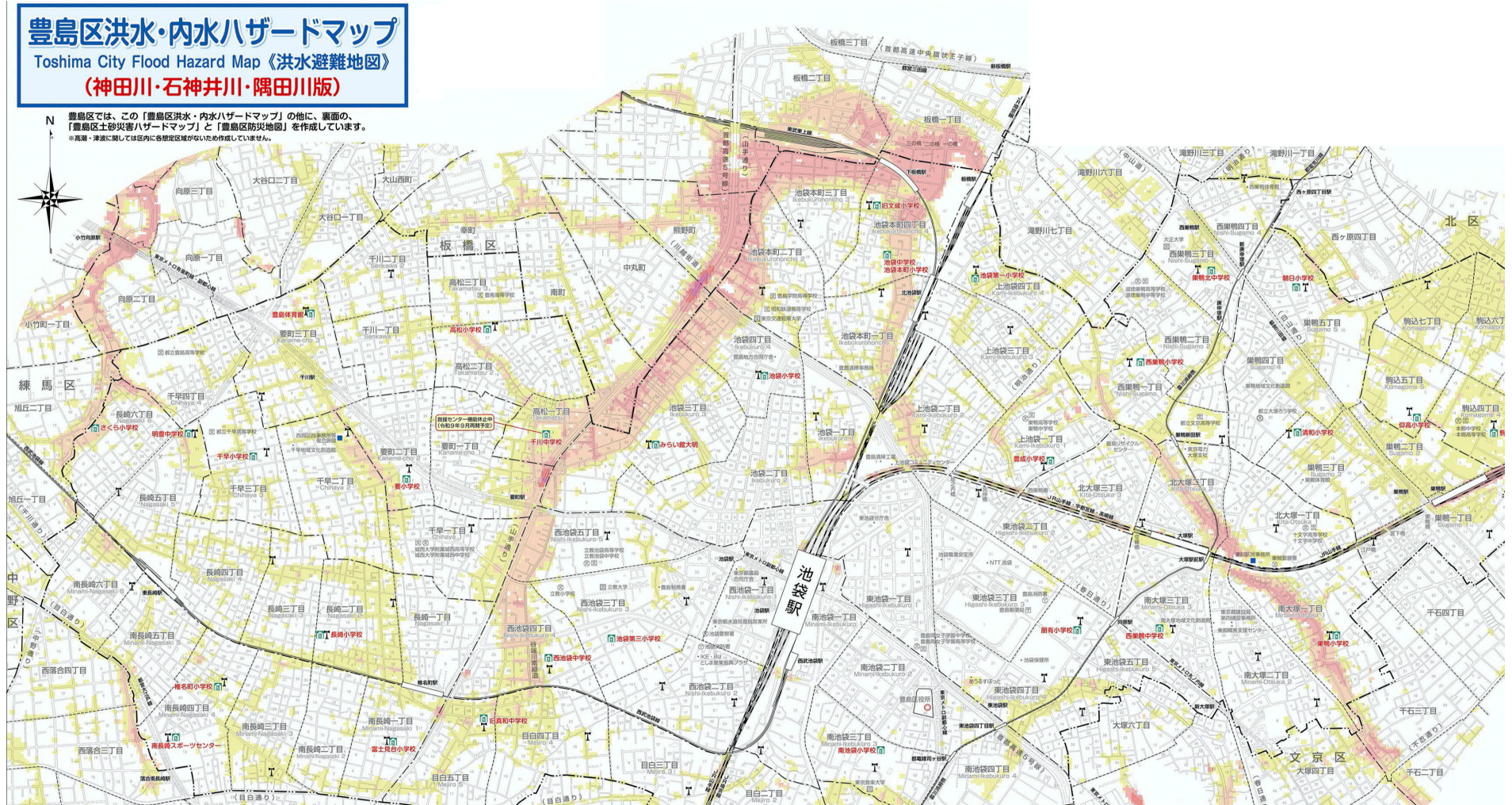








### 3.2 ハザードマップで考える





豊島区ハザードマップ（内水氾濫）では、まさに谷端川沿いが突出して危険であることが見て取れる。

また下水幹線整備の図を見ると、重点整備は谷端川、弦巻川、水窪川に沿った幹線であることがわかる。結局 "埋めてしまったツケ" を支払っているのかもしれない。

都市の高台地域における「水害」は圧倒的に「内水氾濫」であり、結局それは「川」ではなく「下水」の問題なのだということが明確になりつつある。

